

【佳作】

カノンと可能性

國崎 萌子（岩手県 岩手県立盛岡第三高等学校 2年生）

下校のチャイムが鳴り終わった体育館に、私たちは膝を抱えて座っていた。床の冷たさがじわりと全身に染み渡る。周りの先輩は渡されたばかりの楽譜に目を通していている。顧問の先生が、各自楽譜を読み込むように、と残して今日の練習は解散になった。隣から小さく息をのむ音が聞こえて、友人の花音が話しかけてきた。

「ねえ、この部分すくくない？」

花音が差し出してきた楽譜のページには、何小節にもわたって音符がびっしりと敷き詰められている。各声部で追いかけてこのようになっている、いわゆるカノンというものだ。楽しそうに笑う花音は次々にページをめくって、ここはね、ここはね、と話を続ける。私は大きな溜息をついて、新品の楽譜を乱暴に鞆へ詰め込んだ。今は、花音の話を楽しんで聞いているだけだ。

「花音さ、私はその楽譜使わないの分かっているよね。私、メンバーに選ばれなかったし」

来月行われるNHK全国学校音楽コンクールの合唱部門に出場するメンバーの発表が先ほどあったのだが、私の名前は呼ばれなかった。顧問に、四年生のうちはほぼ出られないから、とフォロー

されたのだが、ではなぜ花音は選ばれたのだと叫びたくなる。もちろん花音の歌が上手いのは分かっている。それでも結果を割り切れるほど大人ではなかった。不満の言葉ばかりが胸に募って、口から溢れてきそうになる。

「いいよね、花音は。練習の成果って言うんでしょ」

私だって花音と同じ時間練習したはずなのだ。朝練習のために早く家を出て、放課後も体育館を開めるぎりぎりまで練習した。それなのに選ばれたのは花音だけ。仮にどちらも選ばれなかったのなら、もっと納得できたのかもしれない。

花音に顔も向けずに鞆を背負い、足早に体育館を出ていく。背後から、パート会議のために花音を呼ぶ先輩の声が聞こえた。

すでに日の落ちた通路路を一人で歩く。花音に苛立ちをぶつけてしまった後悔と、メンバーに選ばれなかったという怒りの間で、苦しい。夜空に浮かぶ星だけが何も考えずに輝いているようで、無性に腹が立った。

もし明日花音に謝っても、彼女は私を何も責めずに笑うのだろう。これからも一緒に頑張ろう、などとすら言われるかもしれない。私はここでふと疑問を抱いた。花音と一緒に頑張れば、自分も彼女と同じように上手くなれるのだろうか。今までだって同じ時間練習したのに。

「やっぱり才能の差ってあるのかな」

私と花音は、カノンのような関係だと思う。前に行く花音に今から追いつこうと足掻いても、その目標は留まることなく先へ進むだろう。歌っても歌っても追いつかない。やはり限界というものがあるのかもしれない。諦めという文字が頭の中に浮かんだ。ここが自分のゴールなのだろうと諦めることだってできる。

小さく溜息をつきながら家の玄関を開け、自分の部屋に入る。

鞆を背負ったままベッドに飛び込んだ。そのはずみで鞆は開いてしまい、中に詰め込んでいた教科書が飛び散る。布団の上に積み重なった教科書の中に、ぐしゃぐしゃになった楽譜が一際目立っていた。

渡された時にはろくに見もしなかった楽譜を引っ張り出し、ぐっとしわを伸ばす。何ページかめくれば、すぐにカノンが現れた。一番遅れて入るアルトパートの五線譜を指でなぞる。

二ページにもわたってカノンは続いていて、いつまでも音符が重ならない。やっぱり無理なのか、と諦めの溜息をつきながら次のページをめくる。

すると、長く続いたカノンの果てに、アルトがソプラノに追いついているではないか。カノンから、各パートが同じ音を歌うユニゾンへ。なんだか小さな奇跡を見たようで、思わず楽譜を見返してしまった。

長く続けていれば、いつかこうして花音にも追いつけるのだろうか。

自分で限界だと言えはそこが限界になるのだろう。でも、この楽譜のカノンのようにまだ道は続く、それはあきらめない限り続く。お前はまだ歌えるだろう、とカノンに背中を押された気がした。